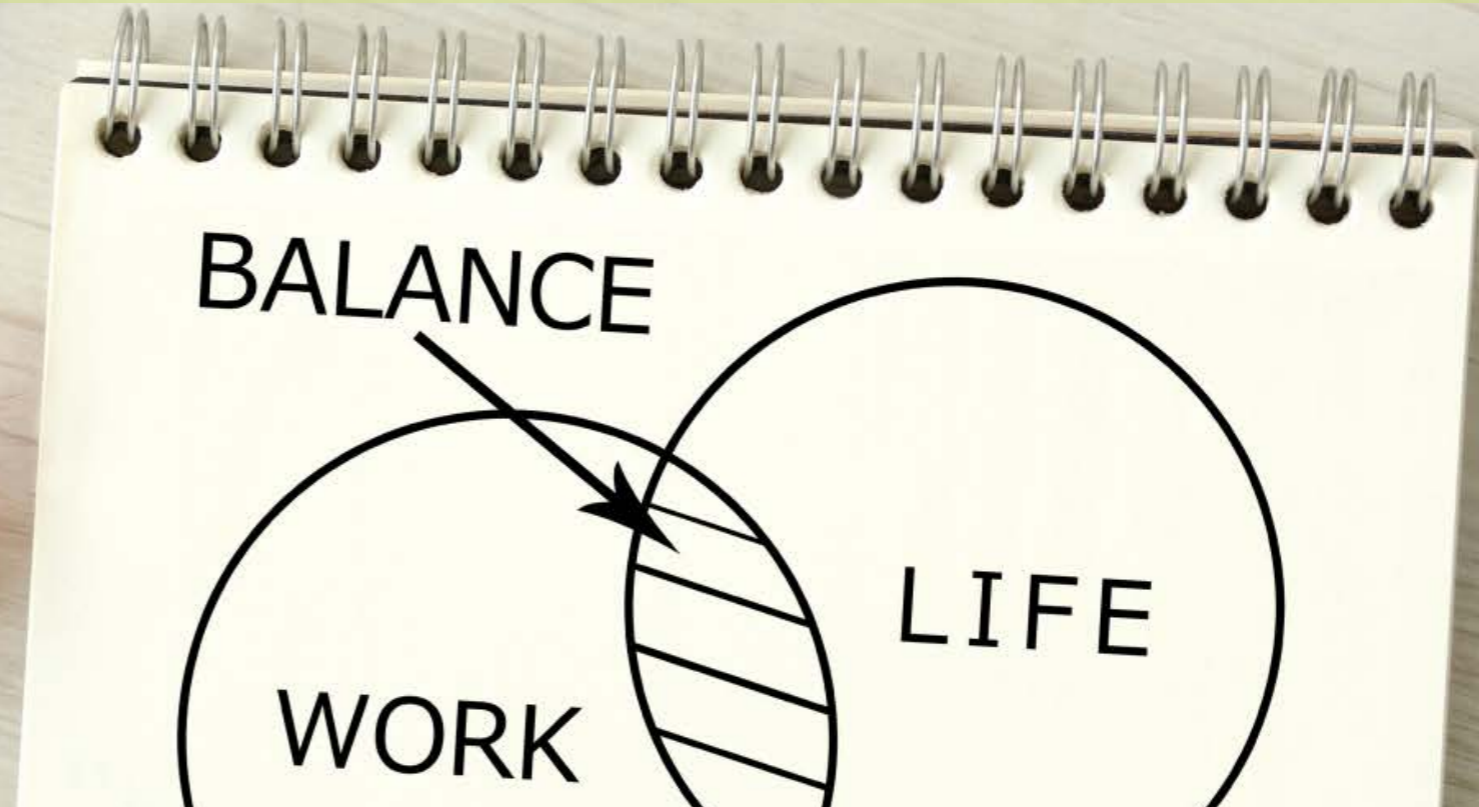


科学的社会主義の経済学の基礎



資本主義社会の搾取の仕組み

8時間働いて普通にくらせる社会へ

東芝 弘明

資本主義社会は、まず何よりも商品の集まりとして現れる



マルクスは商品分析から資本主義の分析を始めた

商品

使用価値

交換価値



商品には使用価値と交換価値という二つの違った面があることを最初に指摘したのはアダム・スミスだった。しかし、アダム・スミスも、あとに続いたりカードも経済学が取り扱うのは価値であって使用価値ではないという考え方だった。

——→マルクスにおける経済学的範疇としての”使用価値”の発見

交換価値とは何か



=

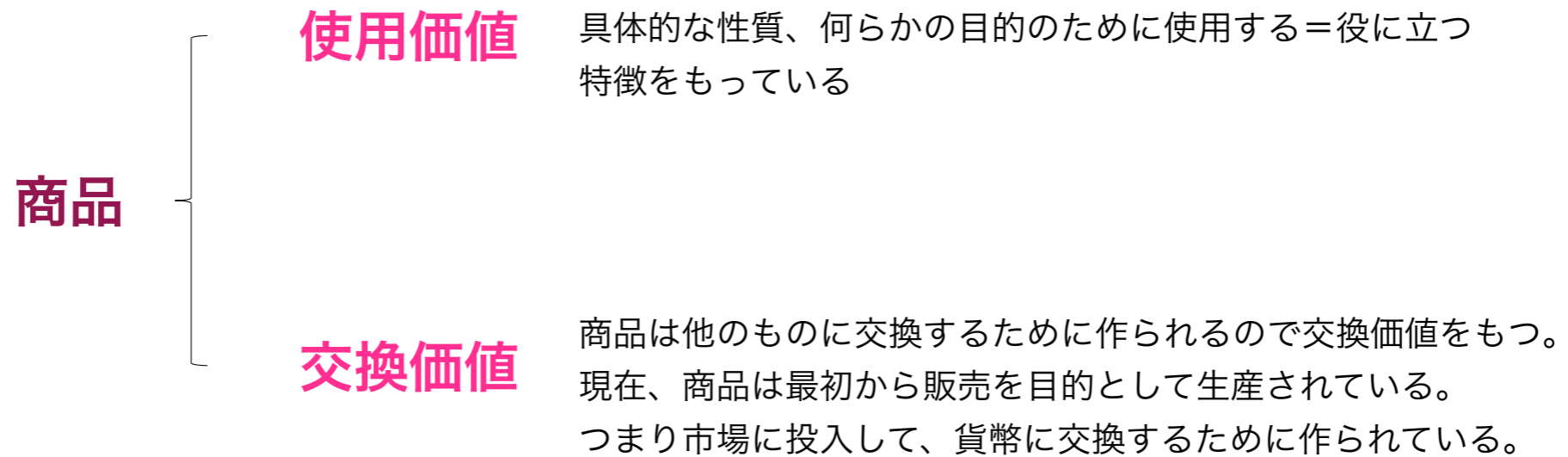


.....etc

他の商品との関係で価値を明らかにする商品
商品は、その商品だけでは、自らの価値を明らかにできず、他の商品と交換することを通じて自らの価値を明らかにする。

商品とは何か

労働の生産物が商品になる。労働の生産物であり、かつ交換を前提として生産していないものは商品にならない。



商品にならない物

空気、雨水、川の水、海の水、雑草、石、家庭料理、日曜大工で制作した物、家庭菜園の野菜etc

労働の生産物であっても他人に販売することを目的にしないものは、商品にならない。

料理を販売するためには、調理師免許や保健所の衛生管理基準を守ったお店が必要になる。商売を始めるためには、販売許可がいる。日曜大工で制作した物を商品にするためには、販売店舗と契約するなど手続きが必要になる、農家は農産物を販売できるが、農家になる必要があり、一定の農地を持たないと農家にはなれない。家庭菜園の農産物を販売するためには、直売所に出荷するなどの手続きが必要。

イベントなどの模擬店などで販売するためには、主催者が保健所に届け出て、限られた日時、限られた場所で販売することとし、保健所の許可と保健所による指導に従わなければならない。

商品の2つの側面と労働の二重性

商品は、市場経済が形成されている社会の中で成立している特有の形態。いつの時代でも労働の生産物は、何らかの使用価値をもっているが、いつの時代でも労働の生産物が交換価値をもっている訳ではない。

商品

使用価値 **具体的有用労働**

(具体的特殊労働)



鞆とコイン、時計、天然水を作る労働は、極めて具体的な作業工程を必要とし、同じ労働であっても具体的な労働の内容は全く違う。

交換価値 **抽象的人間労働**

(一般的人間的労働)

交換価値は現象形態

交換価値は価格という形をとる

交換価値を形成しているのは価値

鞆とコイン、時計、天然水を作る労働は、具体的な労働の内容を持っているが、頭を使い、体を使い、筋肉を使い、物を生産するという点では、同じ人間労働だといえる。具体的な労働を捨象した労働という意味で、抽象的人間労働だとマルクスは規定した。

日本語にも現れている労働の二重性

働く 具体的な意味合い
労働 抽象的な意味合い

労働力も商品なので使用価値と価値をもっている。

資本家は、どうして労働力商品を購入するのか。

それは、労働力商品には、具体的な使用価値があり、それを通じて新たな価値を生み出すという特徴があるからだ。

労働力商品の使用価値と労働力商品の価値とは、1つのものの中にある相異なる2つの側面。労働力の価値は固定的であるが、使用価値は新たな価値を生み出すので使用価値と価値は連動しない。

具体的な使用価値を失った物は商品にならない

壊れた時計、底に穴の開いた鍋、割れた蓋、汚染された天然水、壊れた鞆、壊れたパソコン、破れた服などは、使用価値を失っているので、商品にはならない。

使用価値と価値は、商品という一つの物の中にある二つの側面

マルクスは、商品とは何かという探究の中で商品のもつ2つの側面を解明した。使用価値と交換価値という2つの側面は、対立物の統一という弁証法概念を導きの糸として発見したものであり、それが具体的有用労働と抽象的人間労働という人間の労働の2つの側面と密接不可分だということも明らかにした。

商品は、まずもって使用価値を実現するために作られるが、市場で貨幣に交換されてこそ、価値を実現できる。どれだけ大きな価値を手に入れるかという動機によって、商品の使用価値も大きな影響を受ける。食品偽装や品質管理上のルールを誤魔化した材質の偽装・データの改ざんなどは、使用価値と交換価値が矛盾した傾向を持っていることを物語っている。

何にでも交換できる商品が生まれてくる



=



日本では米が
一般的等価物の
役割を果たした

江戸時代の石高とは
 石(こく)は容量の単位で、1石は10斗
 =100升=約180リットル。**米1石の
 重さは約140~150kg。**
 ・『世界大百科事典』第10巻(平凡
 社 2007年)の「こく 石」の項を見る
 と、「石」は容量の単位。升の倍量
 単位で、1石=10斗=100升だとわ
 かる。平安時代末ごろまでは「石」
 ではなく「斛」と書いていた。1891
 年の度量衡法により10斗=1石=約
 180.39リットルとされた。

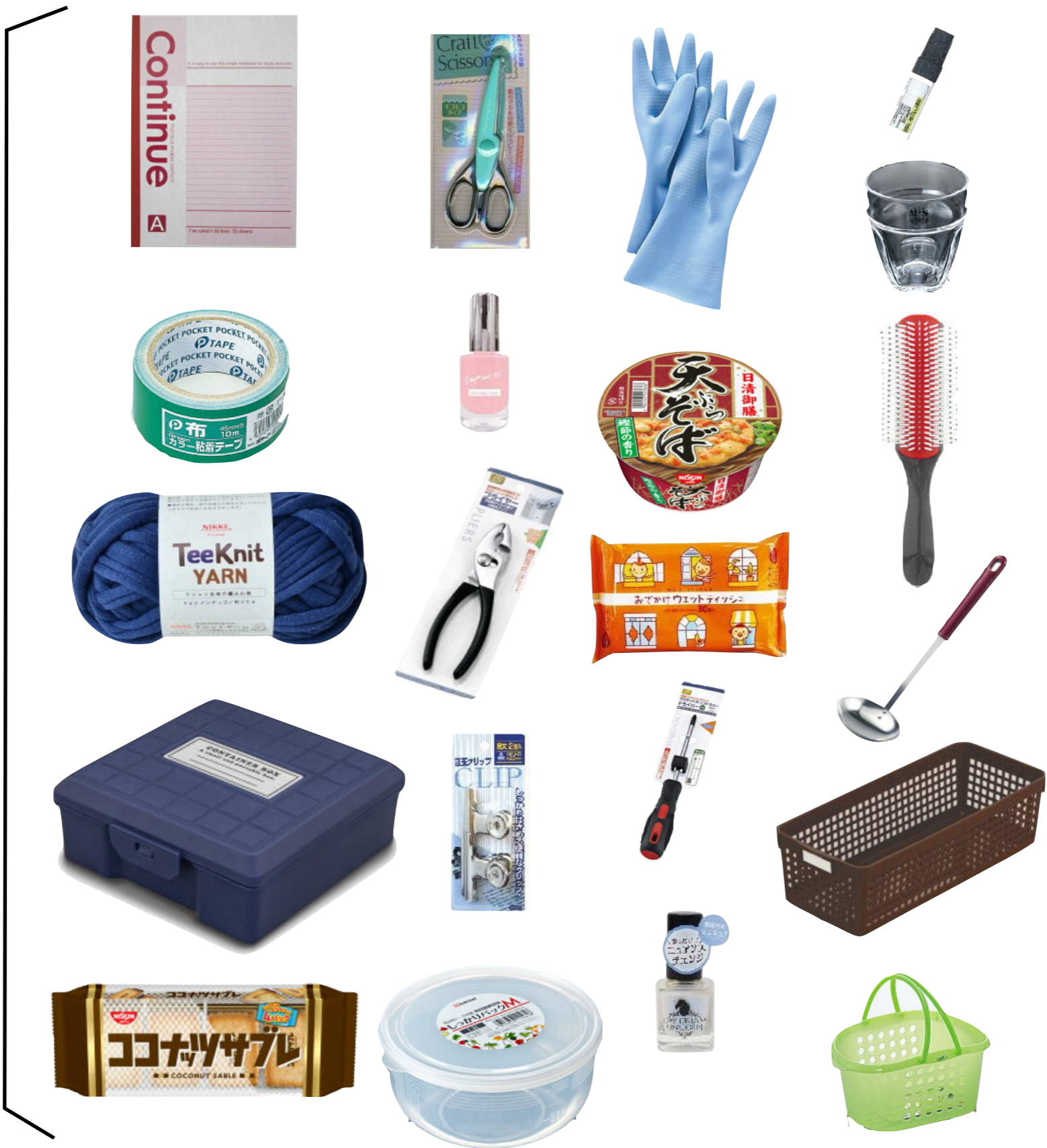
太閤検地以後江戸時代を通じて、田
 畑や屋敷などの土地の価値に至るま
 で、面積に石盛という一定の係数を
 かけて米の生産力に換算して石単位
 で表示するようになった。このよう
 な制度を石高制と言ひ、米以外の農
 作物や 海産物の生産量も、米の生産
 量に換算されて表された。大名をは
 じめとする武士の所領からの収入や
 俸禄を表す場合も石高を用いた。特
 に領民の場合には「百姓高所持
 (ひゃくしょうだかしよじ)」、武
 士(特に大名)の場合には「石高知
 行制(こくだかちぎょうせい)」と
 称されることがある。明治時代の地
 租改正まで続いた。
 一石は大人一人が一年に食べる米の
 量に相当することから、これを兵士
 たちに与える報酬とみなせば、石高×
 年貢率と同じだけの兵士を養えるこ
 とになる。つまり石高は戦国大名の
 財力だけではなく兵力をも意味して
 いた。江戸時代の軍役令によると、
 大名は幕府の命に応じて表高1万石あ
 たり概ね2百人程度の軍勢(非戦闘員
 を含む)を動員する義務を課せられ
 ていた。ただし石高は一般に玄米の
 体積を元に算出するのが常であり、
 実際には成人男性であれば1日玄米5
 合、年間玄米約1.8石が標準的な扶持
 米として支給されていた。

日本ではお米が一般的等価物に



=

日本では米が
一般的等価物の
役割を果たした



日本 明治4年 金本位制が確立



明治4年の
10円金貨 16.6g
現在のお金で
20万円程度のもの

1円=100銭
1円=1000厘
1銭=10厘

明治4年 金本位制制定

1円=1.5gの金

1871（明治4）年、明治政府は新貨条例（しんかじょうれい）を公布しました。これにより、**金本位制が採用**されましたが、金貨不足から銀貨の利用が続きました。

金本位制とは、金を本位貨幣（通貨価値の基準）とする制度です。中央銀行が、発行した紙幣と同額の金を常時保管して、兌換（だかん：金と紙幣とを引き換えること）を保証するというものです。このように、**発行者の信用で、同額の金貨や銀貨に交換することを約束した紙幣のことを兌換紙幣**といいます。

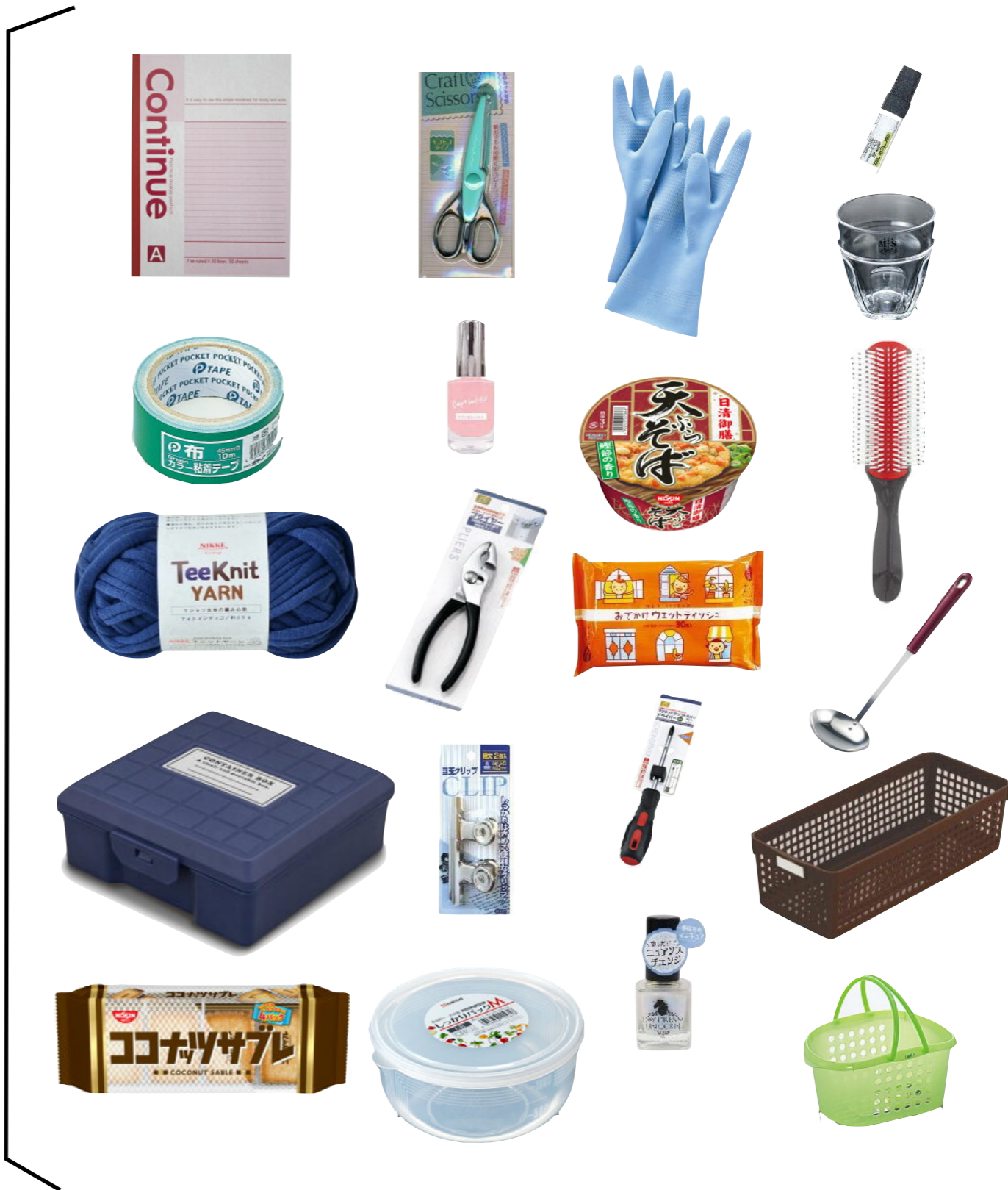
※ちなみに、銀を本位貨幣とする制度を銀本位制（ぎんほんいせい）と呼んでいます。

また、通貨単位として「円（えん）」を制定し、1円を金1.5gと決めました。1円より小さな単位には「銭（せん）」、「厘（りん）」を使い、1円=100銭、1銭=10厘と取り決めました。

※1953（昭和28）年に通貨単位の「銭」「厘」は廃止されました。しかし、債券や為替取引の世界では、1円未満の表記に引き続き「銭」という単位を使っています。



一般的等価物であった
金が貨幣に転嫁した
貨幣も商品だった



なぜ、金が貨幣になったのか？



10円金貨

20円金貨



明治4年

明治4年に発行された10円金貨です。明治4年の発行枚数が約190万枚、明治9年が1925枚、明治10年が36枚、明治13年が136枚、明治25年が不明となっており、市場に出回るコインとしては明治4年のものが殆どです。重量は16.66gとなっており、明治30年(1897年)以降に20円金貨として発行されるコインと同等の重量となっています。

明治4年5月10日（1871年6月17日）公布の新貨条例（明治4年太政官布告第267号）で、一圓金貨を原貨と定め圓（円）の金平価は1円＝純金1.5gとされ、これに基づき、純度90%の本位金貨である1、2、5、10、20円金貨が鑄造、発行された。金貨は法貨として無制限通用とされ、金貨の鑄造を希望する者が造幣局に金地金を輸納して金貨が交付される自由鑄造が定められた。一圓銀貨は貿易専用とされ国内では法貨とせず、開港場において銀貨百圓は、金貨百一圓に等価とされ金銀比価は1:16.01とされた。

明治3年と4年銘の硬貨は、洋式硬貨の鑄造が未経験であったために鑄造の質が悪く、凶案が不明瞭なものが多くあったため、明治5年（1872年）11月14日の太政官布告341号により、新たな鑄造機に使用する極印を作り、再鑄造された。この極印は少しサイズが小さかったため、1、2、5円金貨には同じ量目（質量）で直径の大きなものと小さなものの2種類が存在する。10円、20円金貨においては、新しい極印もほぼ同じサイズのためコインの直径にほとんど差異は無い。



慶長小判
1601年

金は以前として世界の中では貨幣

2015年10月現在

順位	国・組織	保有トン数
1	アメリカ	8,133.5
2	ドイツ	3,381.0
3	IMF	2,814.0
4	イタリア	2,451.8
5	フランス	2,435.4
6	中国	1,693.6
7	ロシア	1,317.7
8	スイス	1,040.0
9	日本	765.2
10	オランダ	612.5
11	インド	557.7
12	トルコ	517.1
13	ECB	504.8
14	台湾	423.6
15	ポルトガル	382.5
16	ベネズエラ	361.0
17	サウジアラビア	322.9
18	イギリス	310.3
19	レバノン	286.8
20	スペイン	281.6

「金が他の諸商品に貨幣として相対するのは、金が他の諸商品にたいしてすでに以前から商品として相対していたからにはほかならない。すべての他の商品と同じように、金もまた、個々別々の交換行為で個別的等価物としてであれ、他のいろいろな商品等価物と並んで特殊的等価物としてであれ、等価物として機能していた。しだいに、金は、あるいはより狭いあるいはより広い範囲のなかで一般的等価物として機能するようになった。それが商品世界の価値表現においてこの地位の独占をかちとったとき、それは貨幣商品になる。そして、金がすでに貨幣商品になってしまった瞬間から、はじめて形態IVは形態IIIと区別されるのであり、言い換えれば一般的価値形態は貨幣形態に転化しているのである」（資本論）

金が貨幣になるのは、その自然的諸属性が価値表現の材料としての機能、すなわち一般的等価形態に最も適しているからである。価値は、抽象的な労働したがって同等な抽象的人間労働の物質化したものであるから、それを表すのに適した性質を持っていないとてはならない。金(または銀)は、どの部分をとっても均質であり、任意に分割したり合成できるので、価値の量的な比較・計量に適している。また、耐久性に富んでおり変質しにくいという優れた性質を持っているため、価値の長期的で安定的な保蔵という点でも適している。（「マルクス貨幣論の研究——価値形態論で論じられたこと——」大石雄爾 駒澤大学経済学論集 第45巻 第2号）

一般的等価物に最も適した金

価値＝抽象的人間労働が物質化したものなので、それを量的に表せるものでなければならない。金は均質であり、分割したり合成でき、計量しやすい。耐久性に富んでおり変質しにくい。

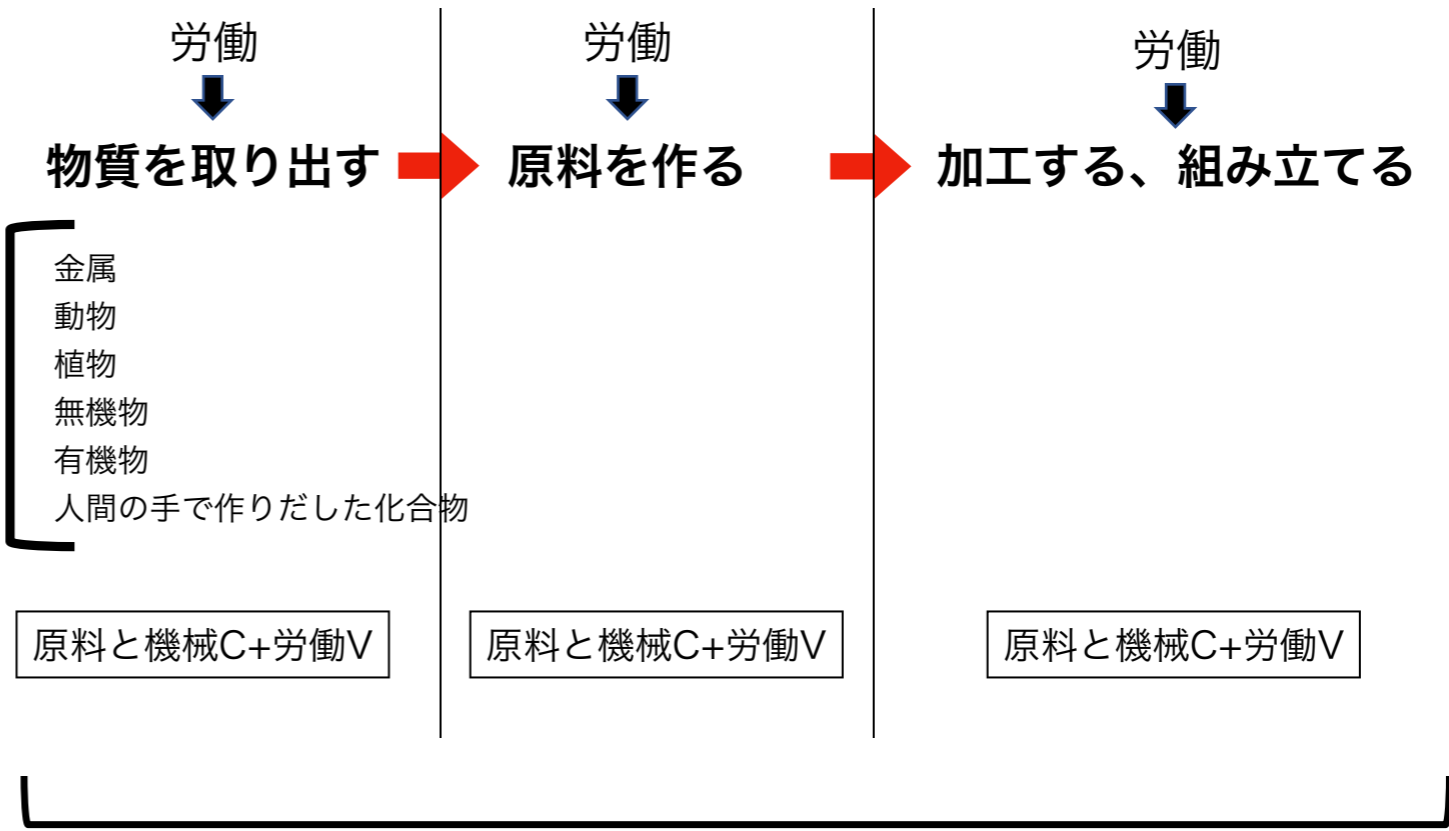
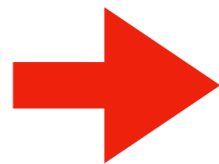


価値尺度
流通手段

貨幣

蓄蔵貨幣
支払い手段
世界貨幣

商品の価値とは何か —— 労働価値説



原料と機械C + 労働V



+



原料と機械（消耗品費）は、商品の価格に転嫁するだけ。

商品の価値は、その商品を生産するのに必要な社会的労働力の量によって決まる。

商品の価値は、商品を生産するのに必要な社会的労働時間によって決まる。

どうして電卓は、55年間で704分の1に価格が下がったのか



53万5000円 1964年

1964年 オールトランジスタ電卓「コンペット」CS-10A シャープ
世界初のオールトランジスタ・ダイオードによる電子式卓上計算機。
当時の1300ccの車とほぼ同じ価格の535,000円で発売された。

55年間

価格は704分の1



760円 2019年

シャープ カラーデザイン電卓 10桁表示 ホワイト系 EL-M335-WX

ロボットによる大量生産によって、
価格が劇的に下がった一番の理由
労働力がほとんど必要なくなったことが、



50万円 1968年

ナショナル パナカラー

51年間

価格は約4分の1



12万7000円 2019年

パナソニック 4Kビエラ

サラリーマンの年収	1965年	2012年	
	44万7,600円	473万3,600円	10.56倍

(厚生労働省の賃金構造基本統計調査)

どうして車は、電卓みたいに安くならなかったのか



54万円 1964年

日産ブルーバード

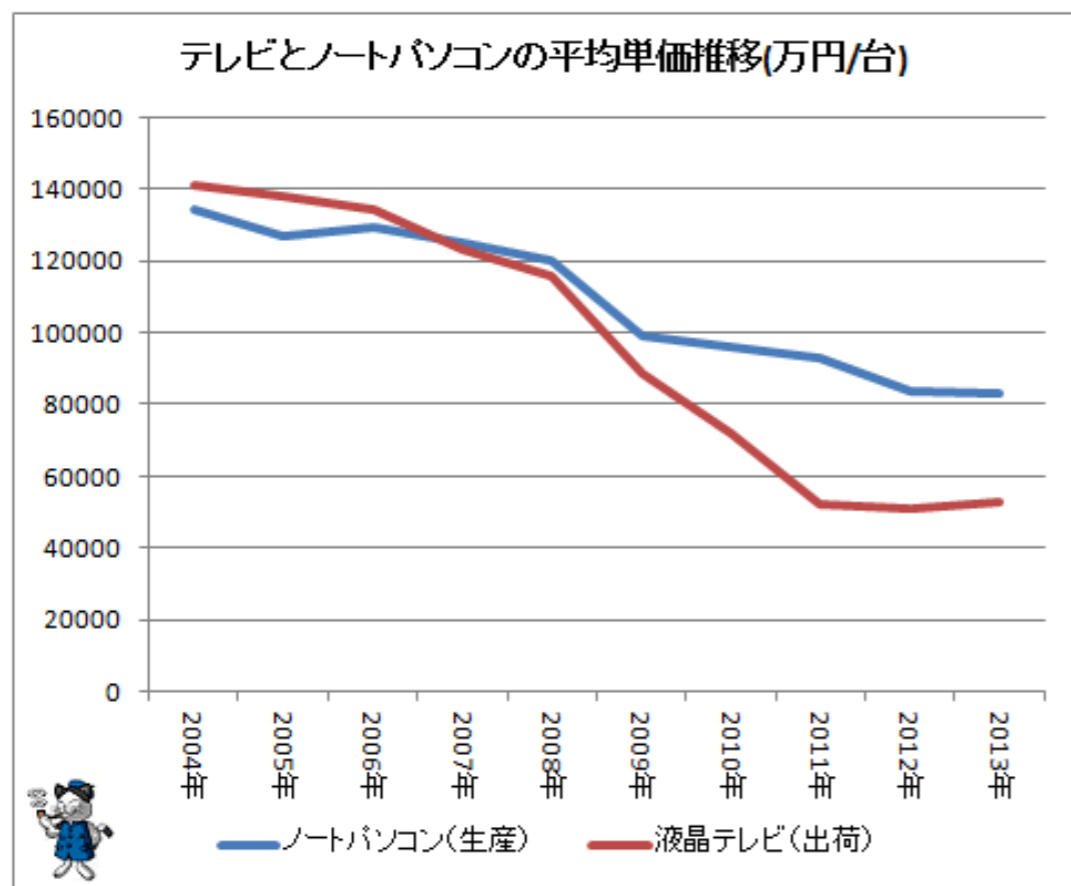
55年間

価格は3.75倍

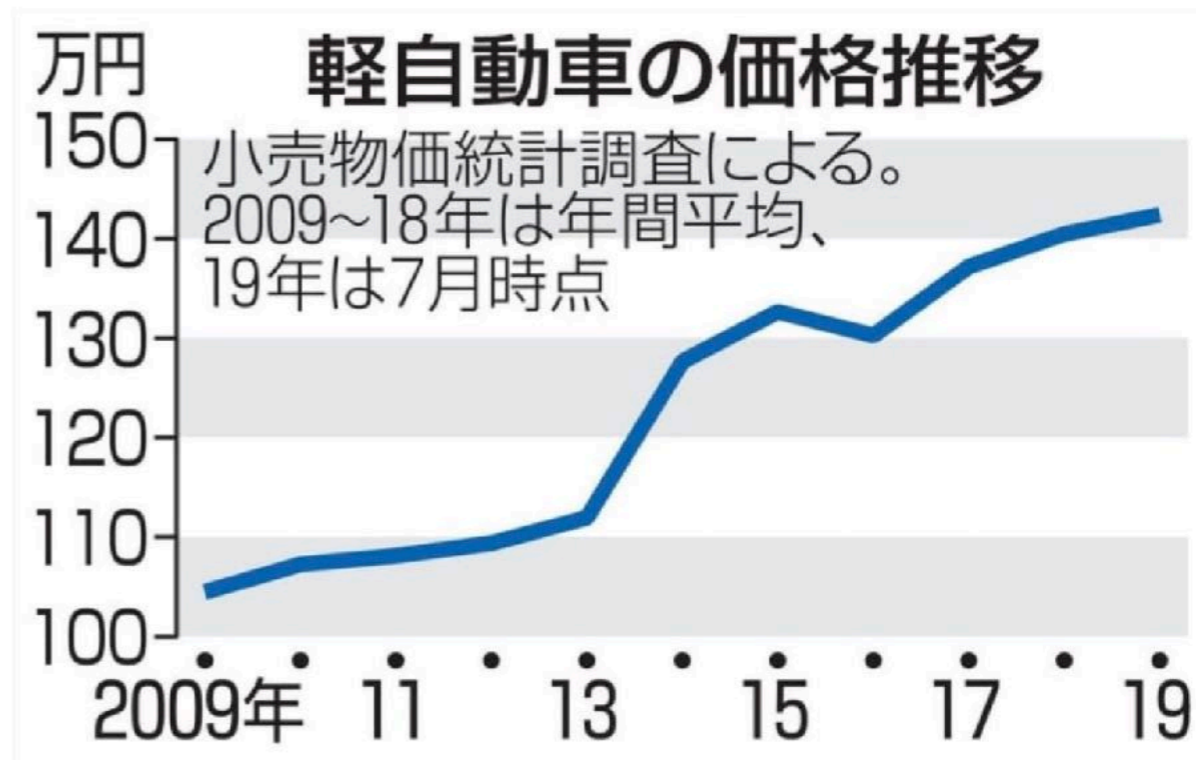


202万6500円 2007年

日産ブルーバード・シルフィー



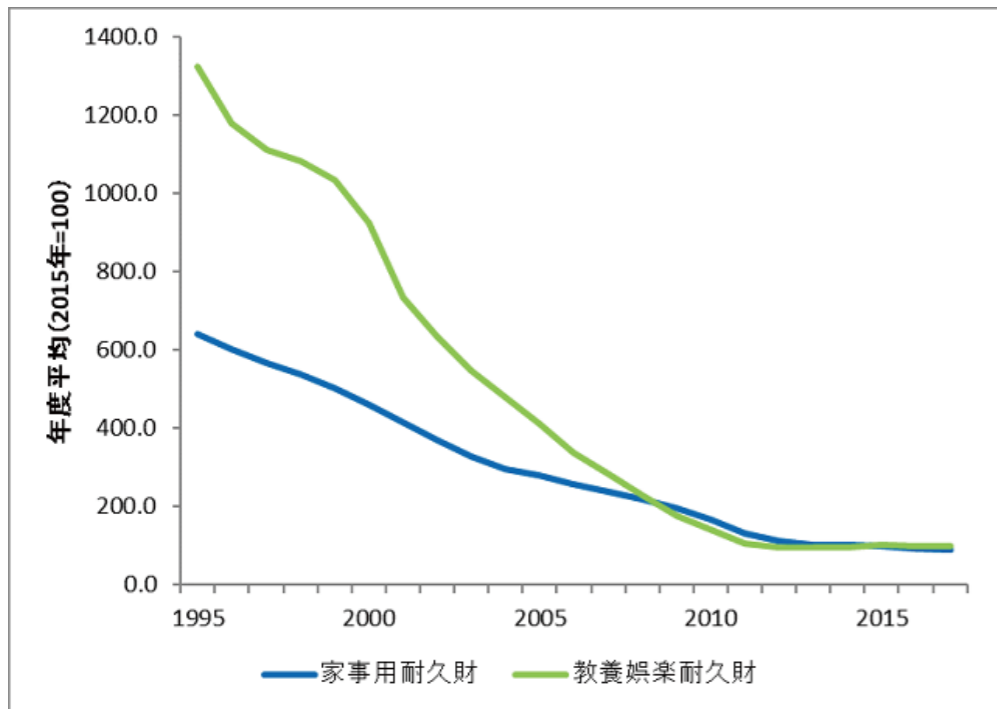
(情報通信白書)



軽自動車の価格推移

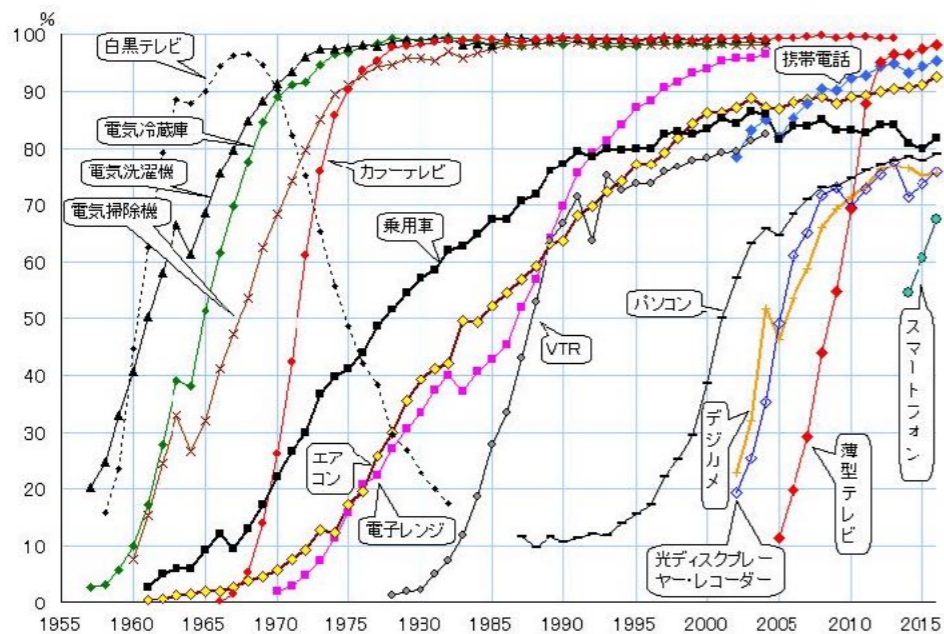
(一般社団法人共同通信社)

家事用耐久財（電気冷蔵庫、電気洗濯機等）と 教育娯楽耐久財（テレビ、パソコン等）の価格推移



(資料出所) 総務省「消費者物価指数」より作成

主要耐久消費財の世帯普及率の推移(1957年~2016年)

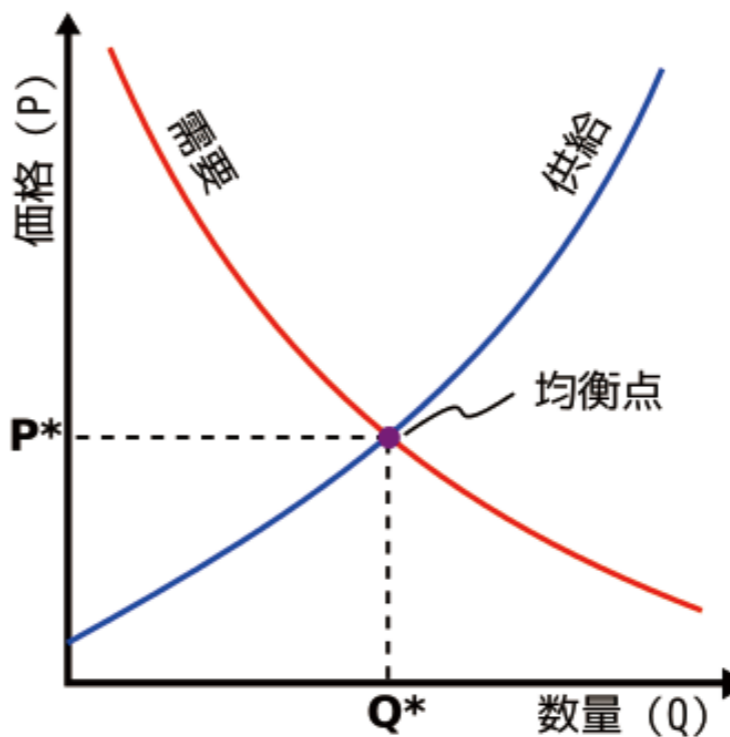


(注) 単身世帯以外の一般世帯が対象。1963年までは人口5万以上の都市世帯のみ。1957年は9月調査、58~77年は2月調査、78年以降は3月調査。05年より調査品目変更。デジカメは05年よりカメラ付き携帯を含まず。薄型テレビはカラーテレビの一部。光ディスクプレーヤー・レコーダーはDVD用、ブルーレイ用を含む。カラーテレビは2014年からブラウン管テレビは対象外となり薄型テレビに一本化

(資料) 内閣府「消費動向調査」

1995年度から2017年度までの期間を対象に、家電製品の値動きをながめてみると(図表5)、「家事用耐久財」(電気冷蔵庫・電気洗濯機など)と教養娯楽耐久財(テレビ、パソコンなど)のいずれについても急速な価格低下が生じた後、13年度あたりから15年度にかけてようやく下げ止まりの動きがみられるようになった。(物価はなぜ上がらないのか?—「アマゾン効果」と「基調的な物価」のあいだ 中里透 / マクロ経済学・財政運営)

需要と供給によって価格が決まる というのは、本当に現実を反映した考え方なのか？



需要と供給の均衡点を示すグラフは、そもそもその傾向として、供給曲線を右肩上がりに描いている。それは、需要が増えると価格が上がり、価格が上がると生産(供給)が増えるという考え方による。しかし、実際は、機械制大工業による大量生産のものである、生産量が増えると価格は下がり、グラフで描くと右肩下がりになる。このことを考えるとグラフの前提が崩れてしまう。
需要と供給の交点によって価格が決まるこのグラフは、商品の売り手が価格を決められないことを前提にし、価格が決まるまでは販売されないことを前提にしている。しかし、このようなモデルは、現実には存在しない。

**商品の価値の現象形態である交換価値(価格)は、
労働価値説にもとづかないと説明できない**

商品交換の定式

商品 (W) — 貨幣 (G) — 商品 (W)

~~商品 (W) — 貨幣 (G) — 商品 (W)~~

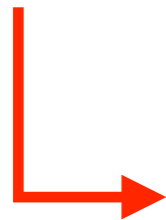
~~商品 (W) — 貨幣 (G) — 商品 (W)~~

資本の定式

資本として貨幣を使って商品を手に入れ、それをまた貨幣と交換する

貨幣 (G) — 商品 (W) — 貨幣 (G) →

投下した貨幣1万円が商品と交換され、再び貨幣1万円に交換されれば、儲けは増えない。



貨幣 (G) — 商品 (W) — 貨幣 (G') (G'=G+ΔG)

商品の分析で明らかにしてきたように商品の交換は、商品の価値にもとづく等価交換だったので、商品を貨幣と交換する流通過程で儲けが増えることはない。



しかし、投下した1万円を商品と交換し、その商品を販売することによって、1万2000円を手に入れるというように資本が増えなければ、交換する意味がない。

アダム・スミスは、労働者と資本家の交換は不等価交換であり、労働者が作りだした価値の不払い部分が利潤だということを見抜いていた。しかし、これは、スミスが明らかにした等価交換による労働価値説と矛盾するので、労働価値説が通用するのは、資本の蓄積以前、つまり資本主義以前だった。リカードは、交換を普通の商品に限り、資本家と労働者の交換を労働価値説の例外とした。



この謎を解明したのはマルクスだった

労働者は、歴史的な経過の中で誕生した

資本の本源的蓄積

労働者

- 1. 生産手段からの自由
- 2. 労働力以外に売る物を何も持たない

資本主義が発展するためには、二重の意味で自由な労働者の誕生が必要だった

資本の本源的蓄積とは？

資本制的生産を特徴づけるものは、労働力が商品化していることである。すなわち、資本制的生産が行われるためには、一方で貨幣および生産手段の所有者と、他方で人格的に自由で自由に労働力を販売でき、また生産手段から引き離されているために労働力以外には売べき何物をももたないという二重の意味で自由な労働者とが存在していることが、前提条件となっている。資本制的生産は、蓄積と再生産過程のなかで、この前提条件を維持・再生産するとともに、ますます増大する規模で再生産していくのであるが、こうした労働者と労働実現条件の所有との分離は、自然発生的に与えられたものではなく、資本制的生産に先行する歴史的発展の結果として生み出されたものである。このような、生産手段を資本に転化するとともに、生産手段に結び付けられた直接的生産者を生産手段から引き離して賃労働者に転化し、資本制的生産の前提条件を創出する歴史的過程を、本源的蓄積または原始的蓄積という。

資本制的生産は封建制の解体のうえに発展していくが、封建制下の土地保有農民をその生産手段たる土地から切り離し、賃労働者を創出することが、本源的蓄積の全過程の基礎をなしている。この農民からの土地収奪の過程は国によってそれぞれ異なり、それが各国の資本主義の型を形成するが、典型的形態をとるのはイギリスのみである。イギリスにおいては、とくに16世紀と18世紀に二次にわたって土地囲い込み（エンクロージャー）運動が大規模かつ暴力的に推し進められた。こうして暴力的に農村を追放された大量の農民は、無産者に転化し、国家の浮浪者取締法や救貧法によって賃労働者への転化を強制された。本源的蓄積のためには、他方において資本として投下されるべき貨幣財産の蓄積が必要であるが、これも国家の助成によって行われた。イギリスの重商主義的政策がそれである。

[二瓶 敏]

『K・マルクス著『資本論』第1巻第7篇第24章（向坂逸郎訳・岩波文庫／岡崎次郎訳・大月書店・国民文庫）』日本大百科全書



江戸時代の農民



明治時代の農民

日本では地租改正によって税金が払えなくなって没落した農民が多かった。小作になった農民は、半封建的地主制度に囲い込まれるとともに、農民として生きていけなかった婦女子、子どもは労働者になった。一方資本家になった中には、政府による払い下げが多かった。



製糸工場働く女性

明治政府における官営模範工場の払い下げの事例

開設年	工場名	払下年	払下先	払下価格
	高島炭鉱	1874年	後藤象二郎	55万円
1882年	広島紡績所	1882年	広島綿糸紡績	1万2570円
	油戸炭鉱	1874年		27943円
	中小坂鉄山	1874年	坂本弥八	28575円
	摂綿篤製造所	1874年	浅野総一郎	61741円
	深川白煉化石	1874年	西村勝三	12121円
	小坂銀山	1874年	久原庄三郎	273659円
	梨本村不熔白煉化石製造所	1874年	稲葉来蔵	101円
1873年頃	深川セメント製造所	1884年	浅野総一郎 西村勝二	6万1742円
	院内銀山	1884年	古河市兵衛	10万8977円
	阿仁銅山	1885年	古河市兵衛	33万7766円
	品川硝子	1885年	西村勝三他	79950円
	大葛鉱山	1885年	阿部潜	117142円
	札幌麦酒醸造所	1886年	大倉喜八郎	2万7672円
1881年	愛知紡績所	1886年	篠田直方	
1877年	新町紡績所	1887年	三井財閥	14万1000円
	長崎造船所	1887年	三菱財閥	45万9000円
	兵庫造船所	1887年	川崎正蔵	18万8029円
1879年	千住製絨所	1887年	陸軍省	—
	釜石鉄山	1888年	田中長兵衛	12600円
	三池炭鉱	1888年	佐々木八郎	459万439円
	三田農具製作所	1888年	子安峻他	33795円
	播州葡萄園	1888年	前田正名	5377円
	釜石鉄山	1888年	田中長兵衛	12600円
	幌内炭鉱・鉄道	1889年	北海道炭礦鉄道	352318円
	紋龜製糖所	1890年	伊達邦成	994円
1872年	富岡製糸場	1893年	三井財閥	12万1460円
	佐渡銀山・生野銀山	1896年	三菱財閥	256万926円



三菱財閥旧岩崎邸庭園



三井財閥本館（日本橋）

西南戦争後の財政難のため、1880年（明治13年）に「官営工場払下概則」が施行された後に軍事・造幣・通信などを除いた官営工場の多くが整理され、民間に払い下げられた。歳出削減をはかる過程で、政府は、政府と密接な関係を持つ政商に安い価格で払い下げた。このことは、財閥の形成を促すとともに、日本の産業の中核を担う分野の育成に大きな役割を果たした。一方で、政界と財界の癒着もしばしば問題視されていた。（ウキペディア—表も含め）

資本主義社会では、労働力が商品として販売される

労働力商品

- 使用価値: 労働力商品は、商品生産に必要な具体的な労働を行う能力をもっており、同時に労働力を使用し生産物を作ることによって新たな価値を生み出す。労働力商品には、他の商品にはない特殊な使用価値を持っている。
- 価値: 労働力商品を再生産するのに必要な生活手段の総額、つまり生活手段の総額（生活費）をつくりだすのに必要な社会的労働時間によって規定される。

労働能力

生活手段の総額（生活費）

- 1. 生きるのに必要な衣食飲住の費用、文化、教養、娯楽の費用
- 2. こどもの養育費
- 3. 教育費、技能の修得費

その国、社会、地域によって生活手段の総額は決まってくる

- 1. 生きるのに必要な衣食飲住の費用、文化、教養、娯楽の費用
- 2. こどもの養育費
- 3. 教育費、技能の修得費



国によって、生活手段の総額は大きく違う

つまり労働力商品の価値は国によって違うということ



これによって商品の価格が違ってくる



单身者の比較



中国 上海

学生 74000円 (家賃52000円)



ベトナム ハノイ?

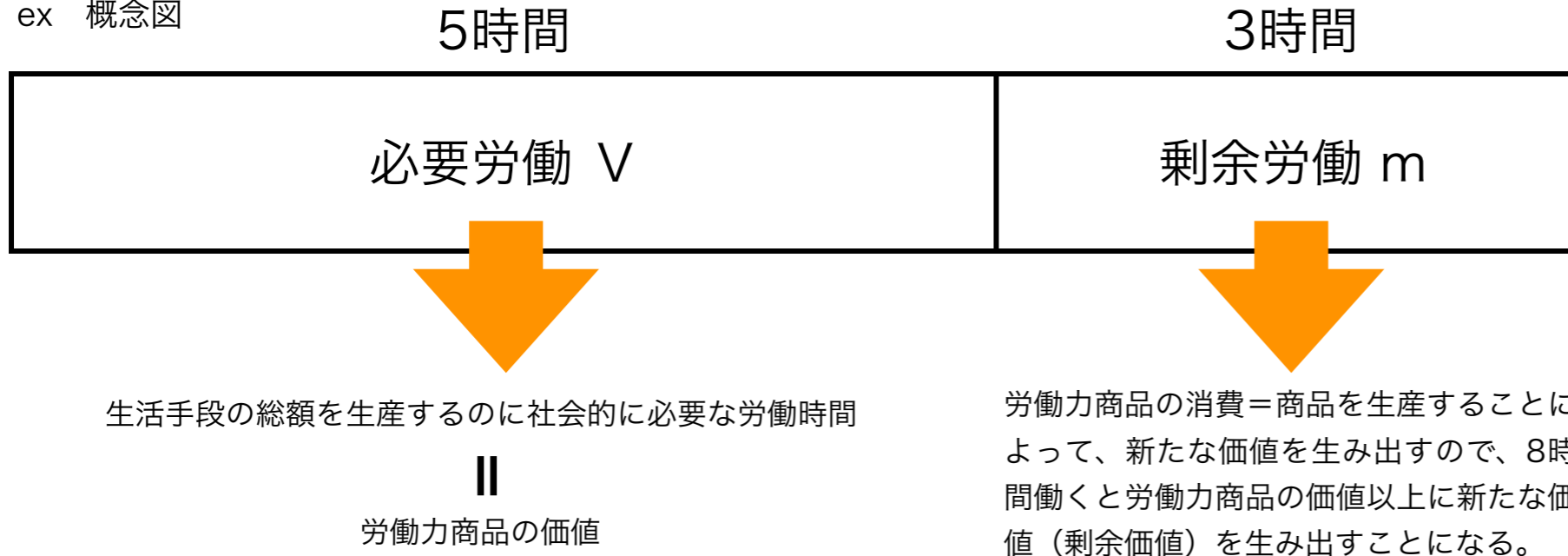
約12万円から13万円程度 (家賃5万円から6万円。交際費は1万円~2万円程度)



日本 東京

16万円程度 (家賃8万円)

ex 概念図

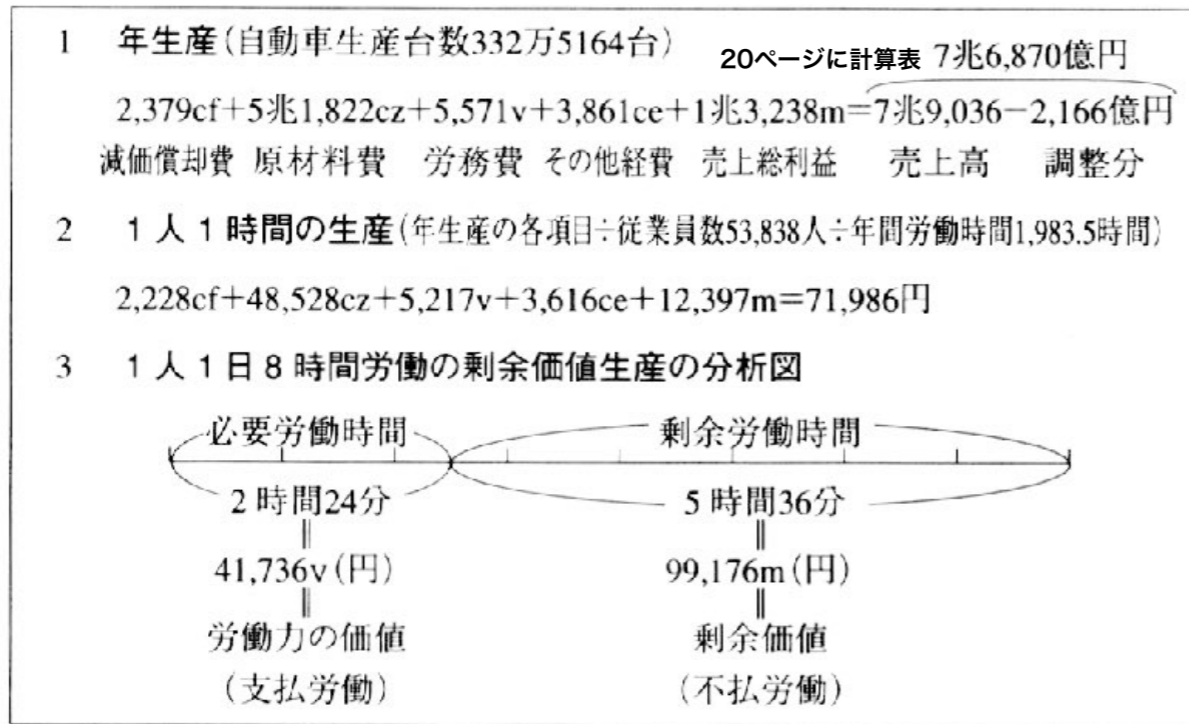


労働力商品の価値は、国、地域によって一定なので、8時間働いて商品を生産したら、労働力商品の価値以上の価値を生み出す。

労働力商品の価値どおり（必要労働時間分）賃金が支払われたら、残りの労働時間分は、剰余労働となり資本家の取り分になる。この仕組みによって、資本主義社会では搾取が行われている。

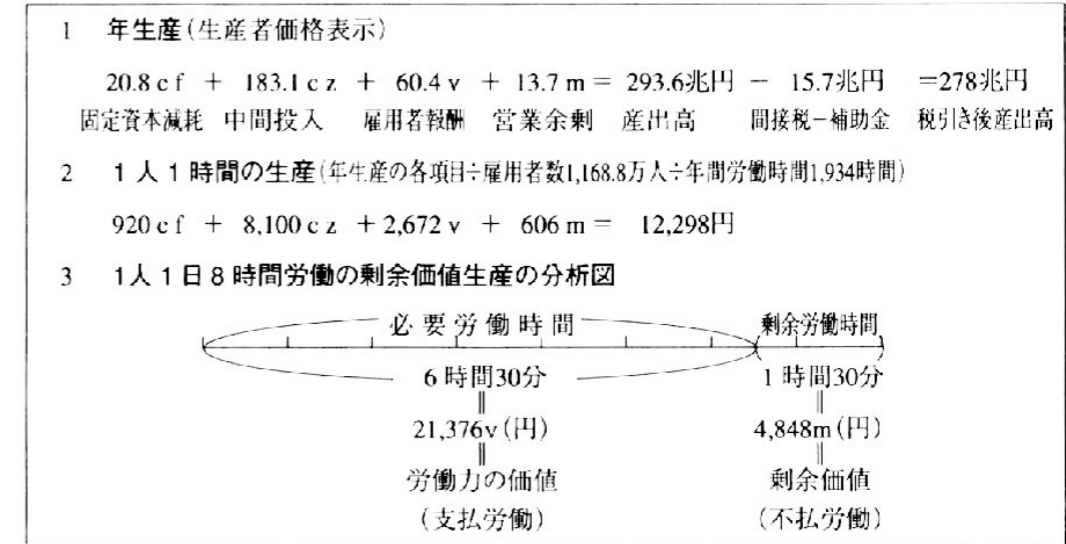
資本家は、労働者を1日8時間という形で雇い、労働をさせ賃金を支払う。この契約では8時間労働に対して賃金を支払うように見える。ここに資本主義的搾取が見えない原因がある。労働力商品の価値どおり賃金を支払っても搾取ができるところに資本主義の特徴がある。

図 5-3 トヨタ自動車の剰余価値生産
(第97期, 2000年4月1日—2001年3月31日)



(出所) トヨタ自動車「有価証券報告書」2001年3月期より作成。単体ベース。年間労働時間は『国民経済計算年報』2001年版, 213ページの「輸送用機械」の労働時間による。四捨五入のため、合計は一致しない。

図 5-4 日本の製造業における剰余価値の生産 (1999年)



(出所) 内閣府経済社会総合研究所編『国民経済計算年報』2001年版(2001年4月10日発行), 194-195, 211, 213ページより計算。四捨五入のため、合計は一致しない。

日本 実際の搾取の実態

松石勝彦一橋大学名誉教授による有価証券報告書に基づく剰余価値の計算

(『新版 現代経済学入門』 松石勝彦著 P130～、136)

2000年4月から2001年3月31日のトヨタ自動車有価証券報告書にもとづく1日あたりの剰余価値と必要労働時間、剰余労働時間の計算の仕方——本に紹介されていたものを表計算で確認した。

トヨタ自動車の有価証券報告書から明らかにできる必要労働時間と剰余労働時間及びその計算式と金額 (単位: 円)									
00年4月1日～01年3月31日	生産台数	減価償却費cf	原材料費cz	労務費v	その他経費cc	売り上げ総利益m	合計	調整分	売上高
トヨタ自動車	3,325,164	2379億円	5兆1822億円	5571億円	3861億円	1兆3238億円	7兆6871億円	2166億円	7兆9037億円
1人1時間の生産の計算	(年生産の各項目÷従業員数÷年間労働時間)	2,228	48,528	5,217	3,616	12,397	71,985		
従業員数	53838								
年間労働時間	1983.5								

1人1時間の v + m	17,613	(1)
労働力の価値 v (1人1時間当たりの労務費×8時間)	41,735	(2)
必要労働時間 (2)÷(1)=v / (1人1時間の v + m)	2.4	(3) 2時間 24分
剰余労働時間 (労働時間8時間－必要労働時間)	5.6	(4) 5時間 36分
剰余価値=(1)×(4)	99,172	
剰余価値 (再計算) (1時間当たりの剰余価値m×8時間)	99,172	
現実の貨幣への資本の転化G—W—G (必要労働時間分) 1人1時間の (減価償却費+原材料費+その他の経費) ×2.4 時間+労働力の価値=必要労働時間に投下した貨幣額	172,227	(5)
1人あたりの自動車の生産台数 (年間総生産台数÷従業員数÷年間総労働時間)	0.03114	(6) 1人1時間あたりの生産台数
	0.07473	1人の必要労働時間2.4時間あたりの生産台数
	0.24910	1人1日8時間あたりの生産台数
剰余労働時間にかかる1人あたりの貨幣額 1人1時間の (減価償却費+原材料費+その他の経費) ×5.6 時間	304,480	(7)
1日8時間、1人の労働者に投下した貨幣G=(5)+(7)	476,707	(8)
1人あたりの1日8時間の売上高G' (G+ΔG)	575,879	(9)
剰余価値m=(9)－(8)	99,172	

注)

1. 不変資本は価値を商品に移すだけ、労働力商品のみが新たな価値を生み出すという視点を買いて分析すれば、剰余価値や必要労働時間は算出できる。
2. 計算式は残業を考慮せず1日8時間労働という条件を仮定して計算している。
3. 売り上げ、総利益が剰余価値。1日あたりの剰余価値は12397円×8時間=99172円。
4. 労働力に対する賃金 v = 労働力の価値 = 支払い労働は、8時間で計算されているので、5271円×8時間=41735円。
5. 支払い労働 v + 剰余労働 m = 41735円 + 99172円 = 140907円 全体に対し比率を計算すれば
6. 29.6%が必要労働時間=2.4時間
7. 70.4%が剰余労働時間=5.6時間
8. 1時間あたりの v + m を出した後で計算するのと同じ。

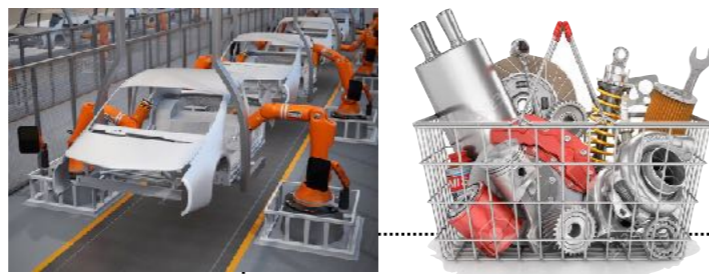
資本の生産過程で剰余価値が生まれる

不変資本 c

生産手段=労働対象（原料、加工された部品も含む）+労働手段（工場、土地、機械）

可変資本 v+m

労働力



労働対象と労働手段 Pm



貨幣 (G) — 商品 (W)

.....P.....W'

貨幣 (G'=G+ΔG)



労働力 A

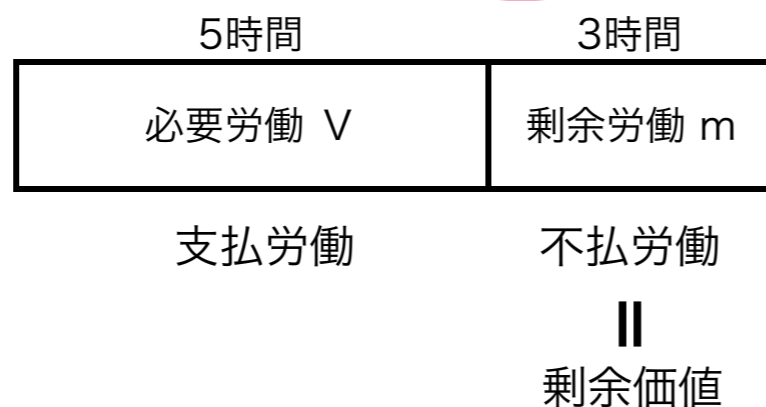


生産過程

車の生産でいえば、労働対象と労働手段は、商品に価格を移転するだけ。労働力を消費することによって商品に新たな価値を付け加える。資本家は必要労働（労働力の価値）を労働者に賃金として支払い（支払労働）、剰余労働（不払労働）分を受け取る。これがΔGになる。

$$\text{剰余価値率} = \frac{m}{v}$$

$$\text{利潤率} = \frac{m}{c+v}$$



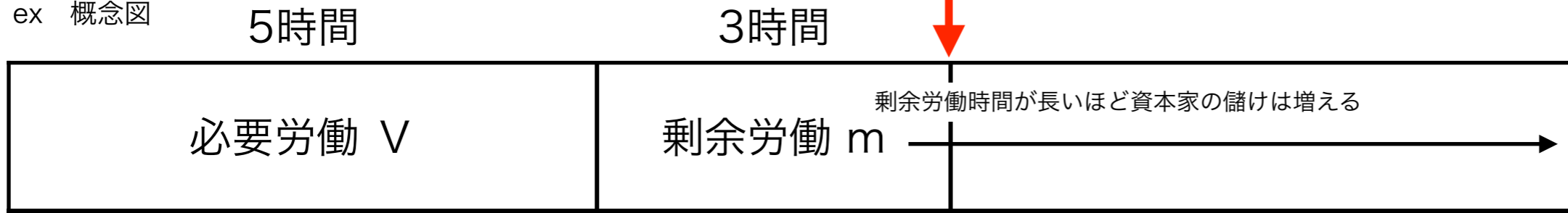
新たな価値は流通過程で実現する

貨幣 (G) — 商品 (W) — 貨幣 (G')

商品の新たな価値は、生産過程で生まれるが、その価値を実現するのは、流通過程での商品の販売ということになる。あたかも商品の価値が流通によって生まれるかのように見える。商品が貨幣に転嫁するためには、命がけの飛躍が必要である。

絶対的剰余価値の生産

ex 概念図



生活手段の総額（生活費）が5時間の労働で生み出せる場合、8時間労働が行われている場合、3時間は、剰余労働となる。

資本家は、労働力商品を買って、使用する。それは、労働力商品を買ってその使用価値を活用して、原料と機械を使って生産物をつくるということ。

資本家は、労働力商品の使用価値を徹底的に活用しようとする。これは資本家の自由である。ここに1日24時間との関係で労働時間をめぐるたたかひがおこる。

資本主義が始まったとき、児童労働は当たり前、一日14時間、16時間労働は当たり前のような状況にあった。しかし、長時間労働を強いられると、労働者には疲労が蓄積して、家に帰って睡眠を取っても労働力が再生産（回復）できなくなる。過労死の原因はここにある。労働者は、奴隷ではない。資本家に売っているのは、労働力であって人間そのものではない。人間を売ったらそれは奴隷になる（アメリカなどでは、労働契約の中でどのような労働を求めるのか、明確に書かれている。使用者は、契約のない労働を労働者に求めることはできない。求めると「それは私の仕事ではない」という反応が返り、拒否される）。労働日をめぐるたたかひは、熾烈を極める。

8時間労働制は、資本家と労働者の長いたたかひの中で労働者が法制度として勝ち取ってきたもの。しかし日本では、この問題が完全に決着しているとは言い難い。

絶対的剰余価値の生産

1日24時間の中で資本家が労働力の使用価値をどれだけの時間、自由に使えるかは、資本家と労働者の力関係で決まる



「労働者が自分の労働力の価値に対する等価だけを生産した点を超えての労働日の延長、および資本によるこの剰余労働の取得——これが絶対的剰余価値の生産である」（マルクス、資本論）

1903年の日本の労働者の状態

「6月後半では、生糸女工は、朝まだ暗い3時50分にたたき起こされ、4時15分から仕事を始める。6時によく朝食にありつく。朝食時間はわずか15分である。女工は6時15分からふたたび働き、5時間近く働いて、11時によく昼食となる。昼食時間はたった15分しかない。1時15分、三たび追われて仕事につく。午後3時によく15分の休憩。そのあと3時15分から7時30分までびっしり仕事をする」（1903年〔明治36年〕政府の公式労働事情調査報告書『職事情』）

拘束時間はじつに15時間40分に達し、実働時間はおどろくなかれ14時間30分になる。3月後半から10月後半までは、じつに朝4時40分から夜9時まで16時間20分拘束され、実働時間は15時間5分に及ぶ。このように、当時の輸出の60%を占めた製糸産業の労働時間は14—15時間労働が普通であった」（『新版 経済学入門』松石勝彦著 P148）（22ページの表参照）

明治時代の長時間労働



表 5-1 長野県某製糸会社の長い就業時間の例

月次	警醒	就業	朝食	就業	午餐	就業	小憩	就業	終業予報	終業	就業時間総計	入浴
	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時	時
6月後半	3.50	4.15	6.00	6.15	11.00	11.15	3.00	3.15	7.00	7.30	14.30	自 7.50 至 9.00
3月後半	4.40	5.10	6.30	6.45	12.00	0.15	5.30	5.45	8.20	9.00	15.05	自 9.10 至 10.30

(出所) 農商務省商工局編「職事情」「綿糸紡績職事情」明治36(1930)年、名著刊行会復刻版、1967年、170-171ページより。

表 5-2 機織地での長い労働時間の例

機織地	季節別	労働時間	始業時間	就業時間
東京府八王子	自 3月 至 9月	15時間	午前 5時	午後 8時
	自 10月 至 2月		同 6時	同 9時
京都府西陣	自 1月 至 2月	13時間	同 7時	同 8時
	自 3月 至 4月	14時間	同 6時	同 8時
	自 9月 至 10月	15時間	同 5時	同 8時
	自 5月 至 8月		同 6時	同 9時
自 11月 至 12月				
京都府丹後	自 4月 至 9月	16時間	同 6時	同 10時
	自 10月 至 3月		同 5時	同 9時

(出所) 前表に同じ、231ページより。

(『新版 現代経済学入門』 松石勝彦著 P149)

資本家による剰余価値についての言及



五島 昇

「絶対的剰余価値の生産のむすびとして、最後に五島昇元東急電鉄社長が東急グループ36社の合同入社式で語ったことばを引用しておこう。

『機械は投下資本に見合った仕事しかしない。しかし、人間は働本以上の仕事をするものだ。会社が発展するためには、社員一人ひとりが給料以上の付加価値を生み出すことが必要だ』
(『朝日新聞』1984年4月3日付) 」



中内 功

「ダイエーの元社長の中内功氏も正直につきのようについている。『大卒の社員1人を生涯雇うと3億円の給料が必要で、その3倍の9億円を稼いでもらわないと会社はやっていけない』
(『毎日新聞1988年12月2日付夕刊)。つまり、3億円の賃金以上に働いて、9億円の仕事をし、6億円の利潤を提供せよ、というのである。剰余価値率は200%になる」

(『新版 現代経済学入門』 松石勝彦著 P142,143)



現代における長時間労働